

蟹に化した人間たち（４）

蛸 島 直

はじめに

平家蟹をはじめ、長田蟹、武文蟹、島村蟹など、人間が転生あるいは姿の一部を刻印したとの伝承を伴う蟹がある。2012年の拙稿「蟹に化した人間たち（１）」では、これらの蟹についての20点の国語辞典といくつかの古文献における記載を概観した。そこでは、上記の蟹をみな同種であるとする姿勢、すなわち同物異名（synonym）説が大勢を占めることが確認できた。続く「同（２）」でも引き続き、ほぼ編年体形式で古文献の記載に注意してきたが、蟹の名称をめぐる転記が繰り返されてきたのであろう、同様な同物異名説が散見された。2014年には、「同（３）」の副題のもと、対象を『狂歌百物語』（1853年）に特定し、同書所収の平家蟹を詠んだ狂歌45首に注目した。ここでは、平家の栄華や横暴、戦の様などが仮託された様々な平家蟹像が成立しており、同時に、実在の複数の蟹がモデルとなっていたであろうことが確認できた。

以上を通じて、筆者は、平家蟹たちをめぐる同物異名説に疑問を禁じ得ず、むしろ同名異物（homonym）の存在に注目すべきと考えている。

前々稿「同（２）」では、新宮涼庭による1813年の記録『西遊日記』の紹介と検討、そして小括をもって擱筆していたが、本稿では、再び、文献上の記載を確認・考察していきたい。文献の提示は編年体形式としたいところだが、前々稿脱稿後、1720年成立の『役者色仕組』に「嶋村蟹」の魔除けが登場することに気づいたので、同書から再開することにしたいが、魔除けに用いる蟹の甲羅について、その他の情報を含めて考察を加えることにしたい。続く、『日本九峰修行日記』には平家蟹と並んで「入水の衆の元結」なるものが記載されており、その正体について議論してみたい。そして頼山陽の詩「壇浦行」（1818）を取り上げるが、ここでは、人間と蟹その他の生物との関係が、転生への信仰に基づくものなのか、比喻表現に過ぎないのか、この二極の間での振幅について考えてみたい。

なお、編年体ということでは、1770から80年頃に成立した『張州雑志』などを先に

取り上げなくてはならないが、同書をはじめ、知多半島の長田蟹に関する記載のあるいくつかの文献については、聞き取り調査の成果も加えて後日、別稿を用意したいと考える。

『役者色仕組』(1720)

『^{やくしやいろしぐみ}役者色仕組』は、京都の人、八文字自笑・江島其磧作、享保5年(1720)成立とされる浮世草子である。創作という点でこれまでの文献とは性格を大きく異にするが、その四の巻に「^{やくびょう まじなひ}厄病の呪とて、門口の壁にかけて置たりし、大き成嶋村蟹、まなこ見出し口をひらき」との記述がある[八文字・江島 1995:135]。欲深い^{おぼ}姨が姪のお竹を遊女屋へ売ろうとするが、お竹には又五郎という恋人がおり、彼は十兩を用意する。ところが、強欲な姨は百兩を胸算用する。そこで、又五郎の友人善五郎が二人のために機転を利かすのだった。善五郎は壁に掛けてある蟹に対し、「一人の姪を売り物にする。姨めに取つき立どころにくるしみを見せ。狂ひ死にさせて。すぐにならなくへだだばしりをさすべし」と大声を上げるのだった。嶋村蟹に対し、「姨に憑依して狂死させ奈落に落とせ」という恐ろしい呪詛あるいは妖術¹⁾の言葉を発するのである。姨は震え出し、「御ゆるし下され」と手を合わせ、「茶でもわかして蟹さまへあげまして下され」という言葉を残し、十兩の金を受け取って立ち去るのだった。実は、善五郎たちは、壁を裏から切り抜き、^{たんろくせう}「丹緑青」に面体を彩色した友人に顔を出させて蟹に見せかけたのだった。前記の「まなこ見出し口をひらき」は本物の人間の顔ということになる。

創作とはいえ、いや、むしろ創作であるがゆえに、当時「嶋村蟹」が庶民の間である程度の知名度を有していたこと、しかも「嶋村蟹」を厄病除けの呪具として門口に掛ける習慣があったこと、また効果があると信じられていたことが理解されよう。さらに、彩色した人間の顔が蟹の甲羅の模様に見えたというのであるが、かかる錯覚を生じさせた基盤がある程度読者たちに共有されていたということになる。

魔除けとしての蟹の甲羅の使用

厄除け・魔除けとして門口に蟹の甲を掛けることは民俗学的に興味深く、『民間伝承』誌上でも議論されている。そのきっかけとなったのは、前稿でも触れたイギリスの生物学者ジュリアン・ハクスリーであった。彼はアメリカ滞在中の1951年に日本人研究者から平家蟹の伝説を聞き、また日本から平家蟹を持ち帰ったハーマン・J・マラーとともに、「人為淘汰による動物の擬態についての珍しい例」と考え、柳田國男に質問状を送ったのである[ハックスレイ 1951:356]。その返書において柳田は、平家蟹について「魔よけ」のために「今でもこの蟹の甲らを農家の入口の上の方に打付けて置く風習が、西部日本の多くの村にある」と述べ、「目に見えぬ外敵をこの怖ろしい顔を以て嚇して逐いかえそうとして居るのです」と説明している。さらに「以前はかの古戦場の近くの街道筋で、店に陳列して旅人に売っていたということです」と付記している[柳田

1951:357]。ただし、ヘイケガニの甲長・甲幅はわずか21mm・22mm、キメンガニでも31mm・33mm、サメハダヘイケガニではその中間となる[酒井 1942:40-41]。この大きさの甲羅を「打付けて置く」ことは物理的に可能だろうか？。釘で打付けたならば、せっかくの「怖ろしい顔」は破壊されてしまうだろう。柳田は蟹の専門家である酒井恒にハクスリーの動物学上の質問を取り次いでいる。ハクスリーと柳田書簡が掲載されたのは『民間伝承』15巻8号であった。2ヶ月後の同巻10号に酒井による回答の概要が掲載されている。酒井は、長野県産の約1千万年以前のマメヘイケガニの化石から、人類出現の遙か以前に人の顔をした蟹が生活していたことを指摘し、ハクスリーの人為淘汰説を否定している。同時に「世界一の大きき蟹であるタカアシガニは所々でヘイケガニと呼ばれていて、その甲は門口に魔除けとして掲げられています。真のヘイケガニは小蟹で、そのような用途には使われていないと思います」と記し、柳田のコメントに疑問を呈している[酒井 1951:454]。また同号において大島廣もまた「家の入口に甲羅を掲げて魔除けにするのは世界最大の蟹、タカアシガニ(シマガニ)のことで、平家蟹の甲羅はせいぜい拇指ほどもない故、悪魔の眼には止まりそうもありません」と述べている[大島 1951:455]。高松生まれで平家蟹を見慣れており、かつ「戸守の俗呪」に随分気をつけていた宮武省も同様な疑義を示すとともに、酒井・大島の指摘に納得している[宮武 1952:156]。

柳田は民俗学研究の中心にあつて、民俗語彙を尊重しながら全国から寄せられる民間伝承を鳥瞰していたが、語彙への依存が過ぎたのか、同名異物の存在を見落としていたのではないかと想像される。柳田が認識していた「平家蟹」は酒井・大島が指摘するようにタカアシガニのことだったのかも知れない。ただし、柳田が「西部日本の多くの村」と述べていることが気にかかる。

酒井がいう、タカアシガニをヘイケガニと呼ぶ「所々」とはどのような地域であろう。宮島水族館による千葉県から熊本県にかけての16地域におけるタカアシガニの地方名調査では、これをヘイケガニと呼ぶ事例としては愛知県蒲郡の1事例のみが紹介されている[宮島水族館 1986:99]。蒲郡市竹島水族館の安藤隆充前館長のご教示によれば、三河湾に面する同市の三谷、形原、西浦の3漁港では、タカアシガニを戦前から「ヘイケ」と呼んでいるという。あまり知られていないが、三河湾もタカアシガニ漁が盛んで、冬場には、この蟹を名産とする静岡県沼津市戸田方面に出荷されているとのことである²⁾。蒲郡市港町で三河湾魚貝料理店を営む福井淳氏(1958年生)のご教示も同様に、タカアシガニを通常は「ヘイケ」、蟹であることを強調する際に「ヘイケガニ」と呼ぶという³⁾。

後述予定の『^{たんきまんろく}耽奇漫録』(1824・1825年)は、滝沢馬琴・山崎美成らが開催した耽奇会すなわち珍品鑑賞会の記録であるが、同書は、平家蟹の一つ前の珍品として安房(千葉県南部)の漁家の門戸に掛けられた「蟹殻」の図を掲載している[日本随筆大成編輯

部 1993:403]。これは明らかにタカアシガニの甲羅である。解説には、「房総志料に云う穂田吉濱の漁家門戸に奇状の蟹殻を掛く。土俗いう悪鬼を避くるのまじない也と其の殻甚だ大にして（略）蟹殻に墨もて人の面のごとく眉目口鼻を画きて疫病を避くるまじないとし」[同:404]とある。「穂田吉濱」とは現在の安房郡鋸南町保田港付近である。浦賀水道に面する同地では現在もタカアシガニが水揚げされている。残念なことに『耽奇漫録』は、この蟹の地方名については触れていない。同地でも三河湾同様、タカアシガニを平家蟹と呼んでいたとも推測できるが、その可能性は低かろう。なぜなら、同書は、世に「平家」という「鬼蟹または鬼面蟹」について別項目を設け、しかもその「平家蟹」の挿絵は誰が見てもヘイケガニなのである[蛸島 2014:131]。

タカアシガニは現在でも厄除け・魔除けに使用されている。野本寛一は、1975年から88年にかけて撮影した多数の写真を駆使して、日本各地の「門口の呪術」について論じているが、門口の「呪物あれこれ」17カテゴリーの一つとして「蟹の甲羅」を挙げ、その事例として4例が各1葉の写真とともに示されている。野本自身は蟹の種類や名称については言及していないが、写真を見るに、1例はなぜかハナサキガニであり、他の3例はタカアシガニである。注意すべきことに4事例のすべては静岡県内のそれである[野本 1989:86,95]。野本が静岡県出身であるので、静岡の事例数が多くなるのは当然ともいえよう。しかし、他の「呪物」に関しては、北は青森県、南は沖縄県と全国各地の事例が示されているので、「蟹の甲羅」の分布はやはり静岡県に密であるといえよう。

タカアシガニで有名な沼津市戸田では、その甲に人面を描いたものが現在も土産物として販売されている〈写真1〉。筆者は2011年に戸田御浜の勝呂満夫氏作成の「高足蟹魔除」を入手することができたが、その甲幅は乾燥状態で175mm、ピンクをベースに鼻や口は赤く彩色されている。前鰓域と肝域・原胃域を区切る凹部は眉として黒塗りされている。自ずと目尻は上り、怒りで顔を赤らめた様子と見て取れよう。さらにこの作品の場合、閻魔大王をイメージしたのであろうか、額域付近に「王」の字が黄色で描かれている。台紙の裏面には同氏による「高足蟹魔除面の由来」が記されている。その後半には、戸田の村人たちの習慣として「玄関に高足蟹の甲羅に怖い顔を描いてそれを吊るし、魔除け、招福の呪物とし悪魔がこれを見て『こんな手強い人がいたのか、これではとてもかなわない』と云って退散すると信じられています」とある。ここで興味深いのは、「こんな手強い人」なる表現である。村境に猛々しい大人形⁴⁾を立て邪気を威圧しようとする発想に通じるものといえよう。ここでは、タカアシガニの蟹としての属性は影を潜めるかのようである。その甲は人面を描くに都合のよい立体キャンパスに過ぎなかったのだろうか。しかし、〈写真1〉の左右を見比べれば、未彩色の甲羅も十分人面に見えてくるのではないか。

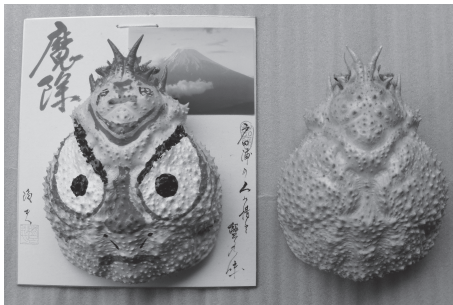
さらに、これに「平家」の名が加われば、より手強そうである。タカアシガニをヘイ

ケと呼ぶ愛知県蒲郡市でもかつては同様なものが作成されていた。竹島水族館の安藤隆充前館長のご教示によれば、昭和まではタカアシガニの甲羅に歌舞伎役者の隈取りのような絵付けをして漁師の玄関口の魔除けにしており、三谷と形原には一人ずつ絵付けをする人がいたという。したがって、実際はタカアシガニであってヘイケガニではない「平家蟹」を魔除けに使用する習慣が実在したということになる。

筆者自身が、魔除けとしての蟹を実見したのは、静岡市丸子の民家の1例だけである。しかも、それはつい最近のことで、なんとズワイガニの甲羅に人面を画いたものであった〈写真2〉。

島村蟹に戻ろう。前々稿でも触れたように、島村蟹は錦絵ではガザミ（ワタリガニ）として描かれる。歌川国芳の『島村弾正高則』（1844年頃）や弟子の芳員による『島村弾正高則 本朝名将鑑』（1858年頃）などではガザミの姿が写実的に描かれたいた。

さらに、ガザミが「厄病の咒」として使用されていた有力な証拠がある。森光親画、金屯道人すなわち仮名垣魯文（1829-1894）識の『厄病除鬼面蟹写真』（刊行年不明）は護符として販売された錦絵である〈写真3〉。魯文が記すところでは、西海の「鬼面蟹」は弾正高則の霊が化したもので「島村蟹」という。その甲をとって門戸に吊るせば厄除けになるが、「写真」すなわち写生画を門戸に貼っても同様な効果があるという。光親



〈写真1〉(左) 高足蟹魔除面：戸田御浜の勝呂満夫氏作。
戸田みなとの駅にて2011年11月購入。
(右) ほぼ同サイズのタカアシガニの甲羅：筆者蔵。



〈写真2〉 民家の門口のズワイガニの甲羅。
静岡市駿河区丸子にて2006年2月撮影。



〈写真3〉『厄病除鬼面蟹写真』
森光親画・金屯道人識：筆者蔵

が描くこの蟹は明らかにガザミの仲間をモデルにしている。魯文が記すように厄病除に必要なのは甲のみのはずだが、光親は蛇足でもあるまい、蟹に脚を画き添えている。鋏脚（ハサミ脚）がやや貧弱であるが、腹部（いわゆるふんどし）の一部が上面からも見えることから抱卵中のメスをモデルにした可能性が高い。筆者は、ガザミが島村蟹とされること、すなわち島村貴則とガザミが結び付けられることに関して、貴則が水中に没する際に敵兵二人を脇に挟むほどの腕力の持ち主であったこととガザミの強大な鋏脚との連想を指摘したが〔蛸島 2012：197〕、どうせならば鋏脚のより強大なオスをモデルにすべきであったのにと考える。とはいえ、実際に厄除けに使用されたのは甲のみだったのであるから、オスメス双方の甲が使用され、かつ重要だったのは甲に読み取れる人面模様だったのであろう。

宮武の指摘や、野本の研究、また、筆者の拙い経験とわずかながらの聞き取り調査から、少なくとも最近の分布を見る限り、柳田が「西部日本の多くの村」というのは疑問に思われる。ここで二つの可能性が浮上してくる。その一つは、失礼ながらも、柳田の思い込みが強く、壇ノ浦方面に視線が向ってしまったという可能性である。ハクスリーの質問の一つは、戦場を問うもので、これに対し、柳田は「平家の一族が全滅したという戦場はダンノウラ（壇ノ浦）で、九州への渡り口、モジ（門司）という海峡の港のごく近く」と回答しているのである〔柳田 1951：357〕。もう一つ考えられるのは、柳田のいう「平家蟹」がヘイケガニでもタカアシアガニでもなかったという可能性である。筆者が推測するに、それはガザミなどワタリガニの仲間ではなかろうか。本尾 洋氏の調査によれば、石川県安宅ではヘイケガニはガザミの地方名である〔本尾 1974:11, 宮島水族館 1986：102〕 1986：102〕。また、宮武は、豊前国企郡（現在の北九州市及びその近辺）で「ハジカの禁呪」すなわち麻疹除けの呪物としてワタリ蟹の殻を吊るしてあるのを目撃している〔宮武 1952：157〕。

『役者色仕組』に描かれた嶋村蟹であるが、ヒトの顔の大きさという設定であった。ガザミやタイワンガザミならば、甲幅は約150mmとなるので〔村岡・小田原 1995:36〕、ヒトの頭幅にほぼ等しくなる。さらに、注目したいのは、蟹に似せてヒトの顔に彩色した「丹緑青」という色である。これは「丹」と「緑青」という二種の顔料を使用したという意味であろう。前者は、「硫黄と水銀の化合した赤土」であり〔日本大辞典刊行会 1975：239〕、後者は「銅に生じる緑色のさびの総称」〔同 1976b：564〕である。赤とくすんだ緑色の組み合わせとなるが、後者は生時あるいは生のガザミやタイワンガザミの甲の色に近く、前者は加熱後のそれらの色である。厄病除けのまじないに使用されたのは、加熱調理して食用した後の再利用であったと考えられる。かつガザミ類は沿海各地に棲息・流通することから当時の人々も生体の色に馴染んでいたことであろう。さらに、善五郎の言葉に反応して姨に取り憑くという設定であるから、生体の色に近づくことが演出効果を高めたのかも知れない。

ところがである。『役者色仕組』には、この場面を描いた挿絵〈写真4〉が添えられ、壁の向こうには、怖れおののく姨と善五郎が、壁の手前には脅かす側の人物が描かれる。しかも、頭頂に水平方向に蟹の甲羅と思われるものを面のように載せている。その下に見える顔は彩色しているとは思われないが、化粧を落とした後の姿なのだろうか。本文の記載との齟齬とともに壁を隔てた彼此には時間差がある。



〈写真4〉『役者色仕組』四之巻挿絵第四図の一部：
東北大学附属図書館所蔵。
『八文字屋本全集』第8巻 汲古書院 p.133 より。

当初は壁の穴から蟹の甲羅を見せておき、話の展開に応じて、途中で彩色

した人面にすりかえて姨を脅したというのであろうか。そもそも「門口の壁にかけて置たりし」嶋村蟹が室内に向かうというのはおかしな話だが、そこは創作である。挿絵の蟹の甲には、人間の目鼻とへの字状の口が画かれている。ずいぶんデフォルメされているが、甲長に対し甲幅が長く、左右の突起は丸みを帯びながらも、ガザミやタイワンガザミの左右の大きな突起（前側縁最後の歯）を画いているようである。本物にはありえないが、後側縁にも大きな突起のようなものが見えるのはご愛嬌といえよう。

このように『役者色仕組』に登場する「嶋村蟹」はガザミであったと考えられるが、以上を通じて確認できたのは、ガザミとともに、静岡県を中心としてはタカアシガニが厄除け・魔除けに使用されてきたこと。また、かの柳田國男にさえ誤解があったのだが、ヘイケガニ科の蟹たちが魔除けとして門口に掛けられることはなかったであろうこと。ただし、ガザミとタカアシガニは、ともに地域によっては「平家蟹」と呼ばれることがあり、三河ではまさに「平家蟹」の甲が魔除けに使用されていたのである。また、静岡県では、おそらくは蟹の呼称とは無関係にハナサキガニ、ズワイガニも門口の魔除けに使用されていたことが興味深い。

野本が挙げる4例の蟹であるが、野本は、タカアシガニの1例（浜名郡舞阪町）は「人面を描いているが」、同じ2例（函南町田代・西伊豆町仁科）は「自然のままでも威圧感ある人面を思わせる」と指摘し、「人面を暗示する点も魔除けとして評価される」と述べている。そして、残る、志太郡岡部町殿の蟹は、厳密にはカニではないハナサキガニであり、多数の棘上の突起で被われている。この点、野本は「甲羅の棘の力も魔除けとかかわりをもっている。もちろん蟹の鉗も攻撃力・威嚇力の象徴であり、門口の魔除けとして蟹が好まれる理由の一つであろう」と指摘する [野本 1989:86,95]。ただし、タカアシガニの鉗は、体長の割にはかなり貧弱である。鉗の強大さは先述のように、む

しろガザミの特色であり、鉋の攻撃力や威嚇力は、野本の写真にはない島村蟹にこそ言えることであろう。

ズワイガニについては、筆者が静岡市丸子の民家で1例を実見しただけであるが、棘はもたなくとも、甲羅の模様はそのままで人面に見えなくはない。なお、ハナサキガニもズワイガニも「平家蟹」の異名を持つことは報告されていない。また、ともに静岡県には産せずに、食用に遠くから運ばれ、食後に再利用されたものと考えられる。一方、食用にされることのなかったヘイケガニ科の蟹たちは、魔除けに使用されることもなかったようである。

『日本九峰修行日記』（1813年の記録）

前々稿の最後に紹介した『西遊日記』と同年1813年の同じく下関の記録を『日本九峰修行日記』に認めることができる。同日記は、日向佐土原の修験、野田成亮（野田泉光院：1756-1835）の6年間にわたる諸国巡拝記である。成亮は1813年（文化10年）11月2日に赤間ヶ関に到着し、阿弥陀寺をはじめ下関の各所を訪問する。10日の記録には、ミモス川や対岸の布刈明神の前浜の地形、安徳天皇入水の地の記載に続き「平家蟹、入水の衆の元結など云ふ珍物さまざまあり、世の知る處なれば略す」と記している〔野田 1969：48〕。平家蟹については名称を挙げるのみなのが残念でもあるが、「世の知る處」という認識は重要である。成亮が複数回にわたって予備知識を得ており、実際の見聞がそれと大差なかったということになる。

ところで、「入水の衆の元結」なる珍物とは何のことであろう。その命名法については平家蟹のそれに通じるものがあつたと想像されるので、少々、横道に逸れるが、しばし考えてみたい。『日本国語大辞典』の「元結」の項には「髪の髻（もとどり）を結び束ねる糸、紐の類。古くは組糸または麻糸を用い、後世は糊で固く捻ったこよりで製したものをを用いる」とある〔日本大辞典刊行会 1976a：326〕。したがって、「入水の衆の元結」とは紐状に長い海洋生物であつたと考えられよう。紐状といえば、ゴカイの仲間が思い浮かぶが、多毛類の名の通り滑らかさを欠き、元結には適さないだろうし、そもそも見ていて心地よい姿ではない。

平家蟹とともに販売あるいは展示されていたのであろうから、同じく乾燥標本であつたものと考えられる。しかも、元結が無生物であることから、動物であるよりは植物である可能性が高い。細長い紐のような海藻が有力候補となろう。ならばアマモ科の海藻ではなからうか。アマモの別名は、最長の和名とされるリュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシ（竜宮の乙姫の元結の切りはずし）であつた。ここにも「元結」の名が使用されている。「入水の衆の元結」も同様な発想のもと、さらに壇ノ浦らしいアマモの別称あるいは新命名であつたかも知れない。もちろん、アマモは沿岸部に居住する日本人にとっては決して珍物ではない。もしかすると、屋島や壇ノ浦の平家蟹が赤く彩色

されていたのと同様、展示や土産用に何らかの加工が施されていたのかも知れない。

もう一つの候補として殻の細長いミミズガイやムカデガイ科の貝殻も想像できようか。それらの形は個体によって多様であるが、とくにオオヘビガイの渦巻状の殻は元結を結んだ形によく似ている。ただし、『日本貝類方言集』を紐解くと、ミミズガイやムカデガイ科の貝の地方名が多数収録されるなかで、元結に基づくと考えられる命名例は見当たらない〔川名 1988：156-157〕。やはり、アマモが最有力候補となろう。

正体が何であるにせよ、入水者当人ではなく、その髪の毛を結ぶ無生物であるはずの元結が、何らかの生物に化したという発想、少なくとも両者間の連想が、この生物の命名の背景にあることは大変興味深い。なお、元結は無生物ではあっても毛髪と連続してそれを束ねるものであるから、そこには感染呪術的発想が介在していたとも考えられる。

『平家物語』では、壇ノ浦で安徳天皇を抱いて入水する二位尼は女房たちに「急ぎ続き給へ」という一声を残している〔富倉 1967：512〕。こうして入水の衆の元結は海中に沈んだはずである。ただし、安徳天皇の母（建礼門院）は、その「御髪を熊手に懸けて引き上げ」られ、命を取り留める〔同：520-521〕。『平家物語絵巻』等でも印象的な光景であるが、当然にも元結は解け、海中に沈んだであろう。海底に没しなかった建礼門院当人は海洋生物には転生のしようがないのである。この場面は人口に膾炙しており、彼女に代って沈んだであろう元結が、無生物でありながらも何らかの生物に化したという想像が働いたのかも知れない。

同じ場面は、阿弥陀寺（現赤間神宮）蔵の『源平合戦図屏風』にも画かれており、成亮もその場面と「入水の衆の元結」とを見比べたものと考えられる。『平家物語』や平曲の演奏によって得られた知識や関心に支えられ、「平家蟹」や「入水の衆の元結」は参拝者たちに合戦の悲劇を偲ばせる有力な装置となったのである。ちなみに現在でも、赤間神宮では、平家蟹の土鈴「平家かに鈴」が授与品の一つとなっている（写真5）。



〈写真5〉平家かに鈴：赤間神宮にて2011年授与。

「壇浦行」（1818）

頼山陽は文政元年（1818）に西国を遊歴するが、その間の詩作を『西遊稿』にまとめている。そこには平家蟹に触れた「壇浦行」と題する詩が収められている。筆者はその存在を梶原正昭氏の著書『平家残照』より知ったが、同書からそれを引用してみたい。山陽は、文政元年3月14日に下関に達し、知人の家に一ヶ月以上も滞在して詩作に耽り、「壇浦行」を詠んでいる〔梶原 1998:334-335〕。その中間部で、壇ノ浦の合戦における

平家の劣勢に関して「平氏は魚の如く源氏は癩^{だつ}」と表現し、後半では「独り介虫^{かいちゆう}の姓平^{へい}と喚ぶもの有り 沙際^{しやさい} 今に至るまで尚ほ横行す」と詠んでいる。梶原氏の解説によれば、「介虫」とは、「甲羅をもった虫で、蟹のこと」。「姓平と喚ぶもの」とは、「平家とその名を呼ばれたものの意で、平家蟹」とある。「沙際」は「波打ちぎわの砂浜」である。そして、梶原氏は、この部分を「平家の人びとは平家蟹と呼ばれる虫と化し、今も波打ちぎわを横行しているという」と訳されている〔同:338-339〕。ヘイケガニは海底に棲むカニなので、「波打ちぎわを横行」というのは想像の産物といえようが⁵⁾、蟹の異名を「横行の介士」と呼ぶように、横行は蟹の属性の代表でもある。そして山陽は、横行のもう一つの意味、すなわち「ほしいままにはびこる」〔日本大辞典刊行会 1973:347〕に掛けているのであろう。

山陽は平家に対して同情的でもある。この詩の最後は次のように結ばれる。

吾れ冤魂^{えんこん}に語らん 且^{しほら}く哭くを休めよ
汝聞かずや鬼武^{きぶ}の鬼も亦た餒^ううるを免れず
身後^{しんご} 豚犬^{とうけん}となりて交^こも相食^はむを

[梶原 1998:337]

梶原氏によるこの部分の大意は次の通りである。

私は怨みを抱く平家の人々の亡魂に告げたい「しばらく泣くことをやめよ。御^ご辺^{へん}らは聞いていないか、鬼のような武威を奮った頼朝の靈魂も、その子孫が豚や犬のように互いにいがみ合って跡が絶え、祭られることなく中有の闇にさ迷っていることを」。

[梶原 1998:339]

なるほど、「豚や犬のように互いにいがみ合」というのは、平家没落後の頼朝・義経兄弟の対立等を喩えた比喩表現であり、史実を反映したものといえよう。しかし、末尾の一行を直訳するならば「死後、豚や犬となって互いに争っている」あるいは「食い合っている」となる。まさに骨肉相食んだ頼朝や義経は「死後、豚犬となって生前の争いを繰り返している」という意味になろう。

転生か比喩か

山陽は、(A)「平家の平家蟹への転生」と(B)「源氏の豚や犬への転生」をパラレルな関係に置くことにより、死後、地上の様子を知らぬであろう平家の亡魂たちを慰めようとしているのである。(A)と(B)との関係は隠喩的にパラレルであり、(B)の表現自体も隠喩といえよう。しかし、(A)の場合は、蟹にみる人面の刻印という点で換喩

に近づくことになる。このように、(A) と (B) はともに何らかの比喩表現を含む点で連続しているが、(A) は世に知られた民間伝承でもあり、日本人の転生・再生観の反映ともいえる。これに対し、(B) に関しては、同様な伝承は聞かれず、梶原氏の訳に見るように純粋な比喩表現と見るべきかも知れない。この辺をめぐって、人間と他の動物たちとの関係に関する「転生」／「比喩」という二極を設定することができよう。

ただし、山陽が、平家の亡魂たちに呼びかける限りでは、(B) もまた、転生の側に近づくことになる。二極が連続していることを忘れてはならないが、山陽は、また「平氏は魚の如く源氏は瀬」と詠んでいた。これは生前の様を表現しているのだから比喩表現に過ぎないと考えるべきであろう。「魚」といえば、『平家物語』『先帝身投』は、入水後の安徳天皇について「底のみくづとならせ給ふ。(略) 雲上の竜降って海底の魚となり給ふ」と表現している [富倉 1967 : 518]。富倉徳次郎の現代語訳では、「海底の水屑となり給うたのである。(略) たとえば雲上の竜が下って、海底の魚となり給うたのである」となる [同 : 519]。「たとえば」を加えることで比喩に過ぎないことを強調しているようである。もっとも、仮にここで比喩ではなく転生を説いたものとするならば、魚とともに水屑（水中の塵）にも転生したという重複による矛盾が生じてしまう。重複は、比喩であるからこそ許されるものと考えられる。そもそも安徳天皇の入水に際しては祖母二位尼によって、波の下にも都があることが約束されていたのであるから塵や魚に転生してはならないはずである。

ところが、アントクメと称する海藻が存在する。この名称は和名としては1892年に命名されているが、地方名としてのそれが先行している [濱田 2013 : 21]。すでに指摘したことだが、この海藻の形態には、歌舞伎や錦絵に見る安徳天皇の姿を髭鬚させる面があり、この地方名の成立の背景に安徳天皇の入水への関心があったと考えることができる [神山・蛸島 2013 : 17-18]。もちろん、形態からの連想にもとづく比喩による命名に過ぎないのか、あるいはその背景に転生への意識があったのかは確認できない。さらには、安徳天皇とは無関係の命名であり、たまたま音が類似したという可能性も否定はできないが、その場合も、音の類似から、後付けで安徳天皇やその入水を連想する日本人は少なくないはずである。

筆者は、かつて、人間が死後、他の動植物に姿を変えたという伝承の研究に際して3つの課題を指摘した。第一は、その生物の同定あるいは比定であり、第二は、その人物が何故その生物に結び付けられたのかという問題である。第三には、他の動植物への転生・再生・化成・変化・変態・化身など、説明のされ方の多様性に留意すべきことであったが [蛸島 2012 : 189]、まさに多様性に関して、「壇浦行」や「先帝身投」の記載から新たに気づくことがあった。それは、様々な比喩表現を視野に含めておくべきことである。一見、再生等とは無関係と思われる比喩表現が、実は、潜在的には再生・転生の信仰と連続しており、かつ、立場や視点によって解釈が異なりうるからである。

繰り返しになるが、源氏が「死後、豚や犬となって互いに食い合っている」は、少なくとも、山陽と聞き手たる平家の亡魂との間では、転生を語っているものと理解できる。壇ノ浦の戦いをめぐる平家側の転生については、将兵たちが平家蟹に、女性たちは小平家（マダイ）に〔宮武 1952:159〕、あるいはイガイに〔村松 1983:78-80〕、また河童に化し、能登守教経の奥方は河童の元締たる海御前に化したとされる〔和田 2005:514〕。先の「入水の衆の元結」などもこれらの類例に連ねることができよう。一方、源氏側については、源頼政以下の亡魂が宇治川の蜃に化したという伝承があるが〔清水 1923:15〕、海洋生物に関して筆者が把握しているのは、次のタツノオトシゴのみである。

宮武省三は、1913年頃、豊前豊津（現在の福岡県京都郡）出身で門司在住の遠藤琴子という女性から、平家蟹と戦争との関係の流れで、海馬（タツノオトシゴ）のことを「源氏の馬」とも言うことを聞き取っている〔宮武 1952:159〕。馬もまた水中の生物に化生したというのである。いかにも壇ノ浦近辺らしい命名と言いたいところだが、疑問も残る。壇ノ浦はもちろん、もう一つの屋島壇の浦を加えたにせよ、源氏の馬が水死したという事実や、『平家物語』をはじめとする文献上の記載を少なくとも筆者は見出しえない。豊前は、門司区大積で能登守教経の奥方を海御前として祀るなど、平家への同情が深い地域といえる。水上戦に長けた平家に対し、源氏は陸上戦に長け、しかも鶴越や那須与一の扇的など馬が活躍する場面に事欠かない。豊前の人々は、頼山陽と同様な平家への同情のもと、平家：平家蟹／源氏：源氏の馬という並行による平衡を求めたのかも知れない。そこには馬を源氏の象徴とするかのような視線があったのかも知れないが、そもそも馬は東国の文化であった。大林太良は、『万葉集』の東歌を手がかりに、畑作と馬飼育の結合した東国の生業形態と武士発生との関連を指摘している〔大林 1990:83-86〕。

もちろん、源氏の馬に関しては、史実を超え、また空間を隔てた想像が加わっているものといえよう。しかし、同じことは平家蟹についても指摘できるのである。前稿で指摘したように、『狂歌百物語』が収録する平家蟹たちは、壇ノ浦、屋島に加え、富士川、鳴海、伊勢、福原、鶴越、一ノ谷、須磨、明石、室の津、音戸の瀬戸という源平ゆかりの地名を伝えていたのである〔蛸島 2014:135〕。

これまで、平家蟹から少々横道に逸れ、アマモに比定できそうな「入水の衆の元結」やタツノオトシゴの別称「源氏の馬」についてかなりの紙幅を割いてしまったが、これらと平家蟹とは、命名の論理を共有しているように考えられる。宮島水族館の調査によれば、ヘイケガニ科のヘイケガニ・サメハダヘイケガニ・キメンガニの地方名には「ヘイケガニ」に加え、形態の類似を捉えたと考えられる「クモガニ」（岡山・広島・高知）や、貝殻や木片を背負うという生態を捉えた「コッパシヨリガニ」（青森）、「ゴミシヨイガニ」（神奈川）、「カイカズキ」（石川）などの地方名が目立つ〔宮島水族館 1986:

98-99]。これらが壇ノ浦の戦い以前の古称であったかも知れない。先行する名称を確認することは困難だが、いずれにせよ、壇ノ浦の戦い以降にそれへの想像が加わり、平家蟹なる命名が成立したはずである。さらに、標準和名としてもヘイケガニ・サメハダヘイケガニが命名されたが、同様なことはアントクメについても指摘できそうである。両者は当然にも全国的な名称となったのである。ここで関連する他の生物のいわば全国区と地方区での名称を比較してみたい。

アマモについては「竜宮の乙姫の元結の切りはずし」が全国区であるのに対し、壇ノ浦では「入水の衆の元結」との名称があったものと想像される。ツツノオトシゴの「海馬」は全国的名称であるが、豊前では「源氏の馬」となる。もしも『平家物語』に源氏の名馬の入水などの名場面があったとしたならば、ツツノオトシゴも平家蟹に負けず劣らず、「源氏馬」などの名称で全国区に躍り出ていたかも知れない。女性器によく似るといわれるイガイには婉曲的に「ニタリガイ」（北海道から長崎）、直截には「オマンコガイ」（香川）などの地方名があるなかで [川名 1988: 198-200]、壇ノ浦で入水した平家の官女たちの化身という広島地方の伝説もある [村松 1983: 78-80]⁶⁾。さまざまな異称をもつ河童に関しても北九州の一部では平家の女官が化したと伝承されている [蛸島 2013: 96-97]。このように、壇ノ浦の戦いは、多くの海洋生物の名称に影響を与えており、それはとくに壇ノ浦付近において顕著であるということが確認できよう。

平家の落人伝説に関する人々の関心は深く、研究の蓄積も豊かである。落人伝説の多くは貴種流離という観念を基底に置くものであるが、他の生物へのいわば貴種転生についても研究者たちがより一層関心を向けてよいように考えるのである。

注

- 1) 動物霊の使役と解釈するならば「妖術」witchcraftと呼ぶこともできよう。その場合、この嶋村蟹は「使い魔」familiaとなるが、世界の妖術において、蟹が使い魔となる事例を筆者は寡聞にして知らない。ただし、同じ甲殻類のヤドカリを用いたそれが奄美沖永良部島で行なわれていた。オカヤドカリを捕まえて呪文を唱えて相手の屋敷に放すという呪詛であるが [蛸島 1984: 121]、ヤドカリを呪文の伝達者にとらえれば「邪術」sorceryといえようが、動物を使役するという点では妖術となろう。
- 2) 2014年8月24日筆者聞き取り。
- 3) 同上。
- 4) 例えば、ショウキサマ [菊池 1999: 846] やカシマサマ [稲 1999: 345-346] など。
- 5) 前稿で指摘した通り、1853年刊行の『狂歌百物語』に収録された狂歌も平家蟹の想像上の棲息場所を多様に語っていた [蛸島 2014: 148-150]。
- 6) 村松氏は、榛葉英治氏の『建礼門院徳子の告白』を引用しているが、同文献は筆者未見である。

引用文献一覧

- 稲 雄次 1999 「鹿島人形」 福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司 神田より子・中込睦子・渡邊欣雄編 『日本民俗大辞典』上 吉川弘文館 pp.345-346
- 大島 廣 1951 『民間伝承』15巻10号 日本民俗学会 p.455
- 大林太良 1990 『東と西 海と山』 小学館
- 笠井純一 2012 「宮武省三」 松井竜五・田村義也編 『南方熊楠大事典』 勉誠出版 pp.505-507
- 梶原正昭 1998 『平家残照』 新典社
- 神山重彦・蛸島 直 2013 : 17-18 「海藻アントクメと安徳天皇：妖怪像の展開：物語学と民俗生物学の視点から (3)」 『愛知学院大学人間文化研究所所報』 第39号 愛知学院大学人間文化研究所 pp.17-18
- 川名 興 1988 『日本貝類方言集：民俗・分布・由来』 未来社
- 菊池健策 1999 「ショウキサマ」 福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司 神田より子・中込睦子・渡邊欣雄編 『日本民俗大辞典』上 吉川弘文館 p.846
- 酒井 恒 1942 『日本蟹類図説』 四版 三省堂
- 酒井 恒 1951 「平家蟹のこと」 『民間伝承』15巻10号 (通巻161号) 民間伝承の会 pp.454-455
- 清水時顕 1923 「人が虫になった話」 『郷土趣味』4巻2号 (通巻38号) 郷土趣味社 pp.15-15
- 蛸島 直 1984 「奄美一村落の病気観一沖永良部島S部落の場合一」 『民族学研究』49巻2号 日本民族学会 pp.103-130
- 蛸島 直 2012 「蟹に化した人間たち (1)」 『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』 第28号 愛知学院大学人間文化研究所 pp.189-206
- 蛸島 直 2013 「蟹に化した人間たち (2)：平家蟹の記録を中心に」 『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』 第28号 愛知学院大学人間文化研究所 pp.85-109
- 蛸島 直 2014 「『狂歌百物語』に見る平家蟹：蟹に化した人間たち (3)」 『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』 第29号 愛知学院大学人間文化研究所 pp.85-109
- 富倉徳次郎 1967 『平家物語全注釈』 下巻 (一) 角川書店
- 日本随筆大成編輯部編 1973 『耽奇漫録 下』 (日本随筆大成第一期別巻) 吉川弘文館
- 日本大辞典刊行会編 1973 「横行」 『日本国語大辞典』 第3巻 p.347
- 日本大辞典刊行会編 1975 「丹」 『日本国語大辞典』 13巻 p.239
- 日本大辞典刊行会編 1976a 「元結」 『日本国語大辞典』 19巻 p.326
- 日本大辞典刊行会編 1976b 「緑青」 『日本国語大辞典』 20巻 p.564
- 野田成亮 1969 『日本九峰修行日記』 第一巻 宮本常一・谷川健一・原口虎雄編 1969 『日本庶民生活史料集成』 第2巻 三一書房 pp.5-63
- 野本寛一 1989 『軒端の民俗学』 白水社
- 八文字自笑・江島其磧 1995(1720) 『役者色仕組』 (八文字屋本研究会編 『八文字屋本全集』 第8巻 汲古書院) pp.75-158
- 濱田 仁 2013 「安徳天皇とアントクメ」 『実業之富山』 68巻6号 実業之富山社 pp.20-21
- ハックスレイ, ジュリアン 1951 「平家蟹についての質問」 『民間伝承』 15巻8号 (通巻159号) 民間伝承の会 p.356
- 宮島水族館 1986 「水棲節足動物の地方名調査」 『日本動物園水族館雑誌』 28(4) pp.79-116
- 宮武省三 1952 「平家蟹余譚」 『民間伝承』 16巻4号 (通巻167号) 民間伝承の会 pp.156-

163

- 村岡健作・小田原利光監修 1995 『カラー図鑑 カニ百科』 成美堂出版
- 村松定孝 1983 『「落人伝説」を読む：日本人はなぜ滅びゆく貴人を慕い憧れるのか』 P H P
研究所
- 本尾 洋 1974 「石川県近海産エビ，カニ類の地方名」 『石川県増殖試験場研究報告』 第13
号 pp.9-19
- 柳田國男 1951 「柳田先生よりの返書」 『民間伝承』 15巻8号 民間伝承の会 pp.357
- 和田 寛 2005 『河童伝承大事典』 岩田書院

